

〈安宅〉における立衆と地謡

金沢大学人間社会研究域教授

西村 聡

都落ちする義経主従は十二人の作り山伏となった。主君の義経(子方)と先達の弁慶(シテ)以外に、伊勢の三郎はじめ十人が山伏姿で随行する(金剛流では通常六人で、その「十人」を表現する)。そのようにツレが大勢、立衆として舞台に出ることが、観客の目にまず強い印象を与える。十二人しかない心細さより、舞台を狭く見せる立衆の数と、主従が心一つに声を合わせる謡の音量とが、流離の旅路をうたいながら、圧倒的な存在感を感じさせる。

安宅の関を前にして主従が隊列を解き、休息する段になると、合唱ではなく会話の言葉を、それぞれが交互に発してゆく。その時、立衆の一人が、弁慶に意見を求められて、力づくで関を破ろうと提案する。意見を述べたのは立衆の一人に過ぎないが、別の意見を持つ一人が立衆の中にいるとも思えない。はやる気持ちからする強行論は、皆に聞けば立衆の総意となろう。しかも、それは先々の困難を増やす浅慮といえる。立衆はあくまで衆としてあり、弁慶を超えられないことに意味がある。

その弁慶は最後まで強行論に傾かない。弁慶の思案により強力に変装した義経が怪しまれ、弁慶が散々に打擲しても富樫に通じない最大の危機は、一見、立衆の打ち刀を抜きかけ、詰め寄る威勢が富樫を押し切り、打開したかに見える。

地「方々は何故に、方々は何故に、かほどいやしき強力に、太刀刀抜き給ふは目だれ顔の振舞か、臆病の至りかと、十一人の山伏は、打刀抜きかけて、勇みか、れる有様は、いかなる天魔鬼神も恐れつべうぞ見えたる

(引用は金剛流現行謡本による)

弁慶は打擲する前のような制止の言葉をもはや発していない。勇む山伏が十一人(強力に変装した義経を除く)いるということ、弁慶も含めて数えるのであり、それゆえ立衆ではなく地謡が謡うと考えられる。しかし、さすがの弁慶も万策尽きて、ここに至り強行論に与したというわけではない。弁慶は打ち刀を抜きかける立衆を杖と背中では制して、太刀刀を抜くのは卑怯、臆病といい、富樫に対抗しながら、立衆にも打ち刀を抜かせない。つまり、右の地謡はなおも弁慶の統制下に集団が乱れず威圧することを表している。

その威勢にはいかなる天魔鬼神も恐れるに違いない。富樫にも観客にもそう見えたはずであると、地謡は語り手の視点で評価を加えている。これ以前に地謡が仕事をするのは、

A 地「よろ／＼として歩み給ふ御有様ぞ傷はしき

B 地「俺阿毘羅畔欠と珠数さら／＼と押し揉めば

C ワキ「関の、人々肝を消し 地「恐れをなして通しけり

恐れをなして通しけり

の三方所の「哥」に限られ、その少なさが会話を主とする劇への志向をうかがわせる。ただ、Aの例は、その前の「掛合」に、

立衆「強力にはよも目をかけじと、御篠懸ススガを脱ぎ替へて、麻の衣を御身に纏マひ、

とある立衆（及び弁慶）からする義経への敬意（傍線部）とほとんど重なる。また、Bの例も、弁慶と立衆が交互に謡う勤行の最後に、「哥」となつて地謡が加勢する形である。その前半は祈祷の文句、「と」を受ける後半が地の文に相当するが、勧進帳読み上げの段でも、

…焔命施主、敬つて白モトすと天も、響けと読み上げたり

と、弁慶自身が地の文（傍線部）まで謡い切り、続くCの例も地の文に見えはしても、前半を富樫が謡う（元頼本・車屋本等の古写本では後半もワキが謡う）。その内容——自分たちが勧進帳の読み上げに恐れをなしたとは、弁慶に聞かせたくない言葉であり、弁慶もまた「もとより勧進帳はあらばこそ」（あるはずもない意）とは、心中のつぶやきにとどめなければならぬ。しかし、それらを地謡の説明に任せるよりも、当人が口にすることで、観客への伝わり方はさらに直接的になる。

このように、〈安宅〉の詞章は会話の緊迫感を追求しつつ、時に物語の視点を交えて変化に富む。そして、一進一退の攻防は主従と富樫の間だけでなく、立方（登場人物）と地謡の間にも認められる。右に掲げた諸例は、主体の未分化な過渡的表現であるかといえば、むしろ所作に頼らない、行き

届いた劇の言葉の実現が注目されてもよいと思われる。

場面は安宅の関から離れたとある山陰に移り、危険を逃れた主従の中心には義経が戻つて、平時の会話を主君にふさわしく先導する。大方はあふれ出る義経の述懐であり、とりわけ「下ケ哥」と「クセ」は、地謡が義経の言葉を代弁し、長々と同調する。居並ぶ弁慶・立衆は、夢から覚めたような泣き顔を、互いに見合わせるばかりである。

そこへ富樫が酒を持参し、面会を申し出ると、弁慶一人が立ち上がつて、最後の危機を引き受ける。義経が再び強力強力の姿や位置に戻るかどうかには言及がなく、酒の力で心を取ろうとする富樫の計略（の恐れ）に対しては、立衆も杯を受けて酔わずにいるぐらいしか、弁慶を支えるすべを持たない。立ち上がれない（歌舞のできない）立衆に代わつて地謡が、今度は孤独な弁慶に寄り添うことになる。主従への指示、富樫との応対、舞に伴う歌謡の一節、…と弁慶がいくつもの顔を使い分けられるのも、そのつど言葉を補いつつ地謡の働きによるのであり、これもまた天の加護を声で聞いたと、後刻思い返されたことであろう。